

# 青森県近代文学館報

## 特別展 「鳴海完造と秋田雨雀」 開催

会期 平成二十四年七月十四日（土）～九月九日（日）

青森県近代文学館では、七月十四日から九月九日まで、特別展「鳴海完造と秋田雨雀」を開催します。

鳴海完造は、四千冊に及ぶ膨大かつ貴重な収集をし「偉大なる書痴」と称されたロシア文学者です。一八九九(明治三十二)年黒石に生まれた完造は、一戸謙三らと文芸同人誌「胎盤」を創刊し、ロシアの作家ゴーリキーらの作品を翻訳発表しました。

一九二七(昭和二年)には、ソ連革命十周年記念祭に招かれ、秋田雨雀に同行してソ連に渡りました。この二人をモデルとして、宮本百合子は「道標」の中の登場人物「秋山「内海」」を描いています。その後、完造は九年間ソ連に滞在し、プーシキン研究者として、諸種の異本などを収集しました。

帰国後は弘前大学や東海大学の図書館に勤務し、ロシア語を教えています。秋田雨雀は、一八八三(明治十六)年黒石に生まれ、東京専門学校(後の早稲田大学)英文科在学中に新体詩集『黎

明』を発表、一九一一(明治四十四)年には戯曲と小説『幻影と夜曲』を出版し、詩・小説・戯曲・児童文学・評論をはじめ、新劇運動やエスペラント運動など幅広く活躍し、本県の文学活動に大きな影響を与えました。

本展は、秋田雨雀没後五十年にあたり、鳴海完造が収集保存していた新資料を中心に、鳴海完造と秋田雨雀の生涯と交流を概観し、二人の活動と業績を紹介するものです。



鳴海完造(左から2人目)と秋田雨雀(右端) 左端は宮本百合子

### 目次

・特別展「鳴海完造と秋田雨雀」開催……………	1
・特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」開催の記録……………	2
・特別展記念「講演と朗読の会」、閉会後の広がり……………	3
・北村小松生誕一〇〇年展に寄せて「北村未知子」……………	4
・父の思い出(金子亞矢子)……………	4
・企画展「北村小松生誕一〇〇年展」開催報告……………	5
・「詩人・村次郎展」を振り返って(上條勝芳)……………	6
・企画展「詩人・村次郎展」開催報告……………	7
・新収蔵資料展開催報告……………	8
・第十回青森県近代文学館川柳大会……………	8
・資料寄贈者紹介……………	9～11
・ギャラリートーク、今月の作家コーナー、館務日誌……………	12

### 平成二十四年度企画展

#### □企画展「斗南藩と文学」

四月二十八日(土)～六月十日(日)

一八六九(明治二年)から翌々年にかけて、現在の青森県の下北地方と三戸郡一体を治めた斗南藩。戊辰戦争で敗れた会津の人々が、藩主松平家の再興を期し新天地を求めて誕生した藩でした。旧斗南藩士が残した文化的遺産及び斗南藩を題材とした作品について概観します。

#### □企画展「加藤謙一と佐藤紅緑」

十月十三日(土)～十一月二十五日(日)

弘前出身の加藤謙一は、児童雑誌編集を志し講談社に入社。「少年倶楽部」の編集に従事し、大衆児童文学の隆盛に尽くしました。佐藤紅緑は同郷の加藤の願いに応えて一九二七(昭和二年)「あゝ玉杯に花うけて」を執筆。少年小説で一世を風靡しました。昭和の子供たちに希望を与えた二人の業績に迫ります。

#### 常設展示室展示替え

平成二十四年度春から以下の文学資料を新たに常設展示します。

◎秋田雨雀「句碑拓本「手を抜けて小さき実をこぼす初載」

◎今官一「草稿」「青春の伝記 若き日の太宰治」第二部「乞食学生」の巻



#### 資料集第七輯刊行

資料集として新たに『今官一・未発表作品集「月下点」他』を刊行しました。故今公恵氏(今官一夫人)より、逝去の直前に賜りました草稿を元に、翻刻・編集したものです。

「砂(村落)その二」、「月下点」、「金冠」(改作)、「評伝アンドリエフ」、「青春の伝記 若き日の太宰治」第二部「乞食学生」の巻(右に写真を掲載)、「龍の章」の六作品を収録しています。巻末の解説は館田勝弘氏(弘前市立郷土文学館企画研究専門官)によるものです。

特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」開催の記録

会期 平成二十三年七月十六日(土)～九月十一日(日)

三十一年の生涯に、日露戦争を背景とする反戦詩「今はの写し急」をはじめ、約千編の詩と二千四百首の短歌、一万句の俳句を遺し、近代文学の夜明けを駆け抜けた異才大塚甲山。

特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」は、彼の没後四十余年にわたり家族によつて秘匿され、後に郷土の研究者たちの手によつて『大塚甲山遺稿集』にまとめられた膨大な遺稿や貴重な書簡を中心に、甲山の生涯と彼の遺した作品に光を当てるものです。現在、甲山の遺稿や書簡のほとんど

は、弘前大学附属図書館の「大塚甲山文庫」に収められており、同館をはじめ関係各位の全面的な御協力によつて展示を実現することができました。

本展は、きしだみつお氏の概説と垣内昭一郎氏の「大塚甲山伝」による甲山の生涯の概観、甲山の詩・短歌・俳句作品についての紹介、郷土の研究者の活動の軌跡、甲山と文人たちのつながりの四つを柱に構成しました。

今回展示した二八五点の資料の中でも、厚さ十一cmに及ぶ自筆稿本『蛇蛻』と『POEM IN PROSE』『蝸甲集』の三冊の詩集、自筆や雑誌切り抜きをまとめた三冊の歌集と四冊の句集は、出版への甲山の熱い思いを伝えるものとして目を惹きました。また、「上野簡易小学校卒業証書」や各辞令、新聞「日本」、「文庫」や「新小説」などの明治三十年代の雑誌、幸徳秋水の署名入りの書籍等は当時の時代背景や世相を伝える歴史資料としても興味深いものです。さらに、森鷗外・坪内逍遙・後藤宙外など明治の著名な文人たちや、鳴海要吉をはじめとする郷土の文人たちの書簡などは、それぞれの人柄やつながりを示す珍しくかつ価値の高い資料です。

加えて、今官一が大塚甲山を描いた「鴉の宿はここである」の原稿や、戸館

幸氏をはじめとする研究者の著作等によつて、平成十七年の『大塚甲山遺稿集』の完成に至るまでの甲山復活の軌跡をたどることもできました。開会式では、甲山の御遺族を代表して大塚宇一氏、劇作家のきしだみつお氏、金子睦男青森県近代文学館長によつてテープカットが行われました。図録にはきしだみつお氏「大塚甲山への新たなアプローチを——没後百年を機に」、今谷弘氏「大塚甲山の詩」、米田省三氏「大塚甲山、俳句の出発」、福井緑氏「自負と鬱悶のはざまに——大塚甲山の短歌——」、竹浪和夫氏「甲山から要吉への手紙」、安田保民氏「よみがえった大塚甲山」、垣内昭一郎氏「大塚甲山遺稿集の刊行」をそれぞれ寄稿していただき、内容の濃いものとなりました。期間中は、県内外から約二五〇〇人の皆様に御来館いただきました。



左からきしだみつお氏、金子館長、大塚宇一氏

第一回文学講座 八月二十一日(日)

青森県立図書館集会所、参加35名  
「自負と鬱悶のはざまに——大塚甲山の短歌——」

福井緑(歌人・「真朱」主宰)  
「甲山詩雑談」  
今谷弘(弘前東高等学校講師)

第二回文学講座 八月二十八日(日)

青森県立図書館集会所、参加51名  
「大塚甲山の俳句」  
米田省三(日本近代文学会会員)  
「いま、大塚甲山が面白い」  
安田保民(作家)

日曜講座 九月四日(日)

青森県立図書館研修室、参加20名  
「大塚甲山の紀行文と旅」  
飛内文代(青森県近代文学館室長)



第一回文学講座 講師 福井緑氏

(飛内文代、青森県近代文学館室長)

特別展記念「講演と朗読の会—よみがえる詩人甲山の響き—」

講演と朗読の会 七月二十四日(日)

青森県総合社会教育センター

参加者 64 名

記念講演

「詩人大塚甲山の生涯を語る」

きしだみつお(劇作家)

朗読

「甲山の心根をうたう」

大竹辰也(アナウンス事務所)

フルート演奏・竹澤聡子

特別展を記念して、『評伝大塚甲山』の著者きしだみつお氏の講演とアナウンサー大竹辰也氏の朗読で甲山の詩を鑑賞する会を開催しました。

前半は『大塚甲山遺稿集』編纂委員長でもあったきしだ氏を講師にお迎えして、甲山の「3 回の上京にウエートを置きながら、甲山をたどる」というテーマでお話しいただきました。きしだ氏は、森鷗外の詩『長宗我部信親』や甲山の詩「我は何ぞや」を交えながら、文壇への足掛りをつけた十九歳の第一次上京、詩人、俳人として全面展開した二十二歳からの第二次上京などについて、熱く語られました。

後半は、竹澤氏のフルート演奏に乗せて、大竹氏が選んだ十一編の詩を朗読とトークで紹介しました。反戦詩からは「今はの写しゑ」「帰郷の兵士」、甲山の創造へのチャレンジとして「年

を腐らす法」など四編、恋唄から「千代子のために」など三編を取り上げました。とりわけ、島崎藤村の「初恋」と甲山の「千代子のために」を比較し、融合させた試みは興味深いものでした。音楽と声とのすばらしいとコラボレーションが、参加者の心に響き、好評のうち閉じることができました。



閉会後の広がり

特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」の開催を機に、甲山のふるさと東北町でも、「大塚甲山没後一〇〇年事業」が企画・実施されました。

東北町歴史民俗資料館でのパネル展

九月二十四日～十月二十日

東北町歴史民俗資料館では、大塚甲山・森田重次郎・米内山義一郎の三人の遺品等を展示・紹介しており、平成二十三年度企画展として「大塚甲山没後一〇〇年パネル展」を開催しました。

当館の作成したパネル 23 枚に同館蔵並びに縁の方々から提供された資料を加えた展示となり、青森まではなかなか行けないという地域の方々から御好評をいただきました。

東北町立上北中学校での講座

「大塚甲山を学習する会」

十月十七日

十月二十二日・二十三日、上北中学校の文化祭で「大塚甲山没後一〇〇年パネル展」が展示されることとなり、これに先立ち、十月十七日、上北中学校において、生徒・保護者並びに地域の方々を対象とした講座が開催されました。

講座では、飛内室長が「なにもものにも負けず—近代文学の夜明けを駆け抜けた大塚甲山」と題して、甲山の生涯と詩について、当時の時代背景を交えて紹介しました。

東北町ケーブルテレビ番組製作

東北町では、町内のケーブルテレビの番組「なにもものにも負けず—近代文学の夜明けを駆け抜けた大塚甲山」を製作しました。

上北中学校での講座の内容を中心に、大竹辰也氏の朗読と風景映像等によって構成された、約三十分の番組です。十二月中旬に完成し、十二月二十六日～三十日に配信されました。今後は、映像資料として活用されることとす。

「見つけよう! 伝えよう! 青森の人財」マンガ誌 vol. 1

平成 23 年 10 月・青森県刊

本誌は、県の人づくり戦略チームが企画し、郷土の先人を紹介するマンガを県内の中高生が作成したもので、二冊刊行され、学校等に配布されました。

大塚甲山のマンガを作成したのは、東北町立東北東中学校の濱田小波さん・鶴ヶ崎綾音さん・岡山未来さんです。三人は、一年がかりで、東北町歴史民俗資料館をはじめた皆さんの資料を取材・勉強し、作画しました。

当館でも監修等に協力しましたが、甲山の詩から「車夫」「漁夫の一家」「今はの写しゑ」「冬の蝶」などを引き、甲山の生涯や大逆事件などの時代背景も取り上げた、内容の濃い力作です。



(飛内文代、青森県近代文学館室長)

# 北村小松生誕一一〇年展に寄せて 北村 未知子

北村小松生誕一一〇年展が開催されます事、感謝しつつ、お喜び申し上げます。「没後三十年特別展」に貴館に伺った時の事が、先日のように思い出されます。早いもので、父が亡くなって、はや四十七年もの月日が経過してしまいました。

明治、大正、昭和の近代日本形成期を果敢に生き、我国初のトーキー「マダムと女房」のシナリオライターであった父は、小説家、脚本家としての活動だけでなく、飛行機をはじめ未知へのあくなき探求、憧れをもち続けて、今風にいえば飛んでる文化人でございました。文壇初の自動車運転免許証を取得したり、ダットサンで東京から八戸まで走行し、ジャズやダンスをこよなく愛し、ニコンカメラを持って洋行する等、関係の方からは「モダンボーイ小松ちゃん」と称されておりまし



北村小松(撮影年不明)

た。今から思いますと、このような父の特別なキャラクターは、元を辿れば祖父「北村益」の血を受け継いだものであったと思われまます。八戸消防団を組織化し、港を築造し三代目の八戸町長であった「益」の長男として、小松は生まれました。武道家でもあった「益」は、厳格な政治家でありましたが、時代を察知し、さまざまな新しい文化を八戸に導入した先駆者でもありました。このような祖父の存在は、小松に様々な形で多大に影響を与えたものと推察されます。

父小松は八戸を離れて上京いたしました。慶大在学中に映画シナリオ界で高い評価を頂戴し、卒業後、松竹蒲田のシナリオライターとなりました。これを機に、蒲田近くに居を構えました。後に洗足池のほとりに移り、本格的に執筆活動を展開したわけですが、六十三歳で亡くなるまで、自ら描いたユニークで個性あふれる人生のシナリオを演じ続けたように思われます。

今回の生誕一一〇年展が、現代にも通じる時代性、先見性という切り口を鮮明に打ち出す事で、直接作品をお知りにならない皆様にも、青森県人北村小松を、改めて知って頂く良い機会になれば幸いです。

(きたむらみちこ・北村小松長女)

# 父の思い出

日本各地を巡業する飛行機興行師が八戸に滞在した際に、自在に空を舞う飛行機に強い興味を持った父は、それがきっかけで飛行機設計家になる夢を抱いて上京したと聞いております。技術者への道は思うようにはいきませんでした。が、松竹蒲田のシナリオライターになり、大空や飛行機への憧れは、後に映画シナリオの世界で開花する事になりました。

東京の洗足池近くの実家では、父は二階の書斎にこもって、夜間に限って執筆活動をしておりました。新聞社の方が下の応接室で連載小説の原稿が出来上がるのをずっと待っていらした光景を今でも思い出すことがあります。本業の執筆はそんな具合でしたが、父は執筆の合間に、エンジン油の匂い漂う工作室に入り、大好きな模型飛行機を制作していました。一番楽しそうな顔をしていました。

近代文学館に展示されている豚の胴体に包丁が刺さり、翼に仕上げた「ぶた号」や、魔法使いの魔女が箒に跨っている飛行機等が自慢の作品でした。

空への興味は飛行機にとどまらず宇宙に及び、新聞に「今夜、円盤が飛ぶ」といった記事が出ると、私は父と一緒に二階の廊下からずーっと夜空を眺め、「どっつちから来るかな？」と二人で、は

# 金子 亞矢子

しゃいだものでした。「空飛ぶ円盤」という言葉は、父が作り出した造語で、今で言うUFOですが、当時この話題を取り上げたラジオ番組等にも良く出演していました。

現代にも通じる卓越性をもって、何事にもチャレンジしてきた父ですが、三島由紀夫さんが書いて下さった父への追悼文にある「飛行機も映画も自動車も円盤もすべて氏の玩具にすぎず、氏の本領は人間通だったかもしれない」という一節は実に妙を得ており、意外に父の全体像を知らなかった家族のひとりとして、納得したものでした。

今回の企画展では、没後三十周年展とは異なった父の生涯を取り上げて下さる事に心から感謝し、文学館のますますのご発展をお祈りさせていただきます。

(かねこあやこ・北村小松次女)



小松製作の模型飛行機ぶた号

## 企画展「北村小松生誕一一〇年展」開催報告

「北村小松生誕一一〇年展」を、四月二十三日(土)から六月五日(日)まで開催しました。右ページの文章は、開催にあたって御遺族から賜り、展示室内に飾らせていただいたものです。

北村小松は、一九〇一(明治二十四)年、八戸町(現・八戸市)長横町に生まれました。慶應義塾大学在学中に松竹キネマ研究所の研究生となり、小山内薫に師事。卒業後は松竹蒲田撮影所に入社して映画のシナリオを量産する一方、劇作家として活躍しました。

一九三一(昭和六)年には、日本初の本格的トーキー映画「マダムと女房」のシナリオを手掛け、映画脚本家として不動の地位を築きました。また、小説集『小市民街』(昭和五年)を皮切りに小説家としても活躍。『限りなき鋪道』などの新聞小説から、軍事冒険小説を経て、『結婚期』などユーモア小説に至るまで、様々な作風を展開しました。六十三年の生涯の中で、小説、シナリオ集、翻訳を合わせて七十数冊の著書を世に送り出した作家です。

当館では一九九四(平成六)年夏に没後三十年特別展として北村小松を取り上げたことがあり、図録も刊行しています。今回の企画では、過去の特別展の成果を踏まえながら、著書や作品掲載誌を多数展示し、その多彩な文学活動の魅力に迫ろうと努めました。

取り分け、単行本に収録されることがなかったため、実態を知ることが困難だった晩年のSF方面での活躍を、雑誌によって紹介できたことは収穫でした。一九五六(昭和三十一年)年に「中学時代一年生」に連載された科学絵物語「少年のひみつ」は、その一例で、主人公の同級生が実は宇宙人だったというストーリーです。

ちなみに本展で紹介した小松作品の中で、宇宙人が登場する最も早い例は、一九五一(昭和二十六)年から翌年にかけて放送されたラジオドラマ「円い影」(当館所蔵の台本を展示)です。この作品には、空飛ぶ円盤を操る、カップパよく似た姿の宇宙人が登場します。

アメリカ生まれのSF(サイエンス・フィクション)という用語が、日本で一般に広まったのは一九五九(昭和三十一年)の「SFマガジン」創刊以後と言われますが、小松の活動はまさに時代の先を行くものでした。御遺族からは貴重な遺品や写真を多数お借りしましたが、それらの資料もまた、卓越した先見性を有したモダンな文学者、北村小松の生き様を物語るものに満ちていました。

総資料点数は二一三点、会期中の来館者数は一四一七人でした。五月八日(日)に日曜講座「北村小松の文学」(文学館主事・竹浪直人)を開催しました。

## 新収蔵資料紹介

この企画展開催を機に、北村家より貴重な資料を新たに多数御寄贈いただきました。その中から三点を紹介いたします。

## ・卒業論文「ユージェン・オニールと

その戯曲について」



一九二一(大正十)年には脚本が初めて映画化され、翌年には帝国劇場十周年記念募集脚本で入選。慶應大学英文科在学中からシナリオ作者として活躍した小松ですが、卒業論文では、アメリカの劇作家ユージェン・オニールを取り上げています。「K.Kitamura」専用原稿用紙二四七枚に綴られたオニール論、末尾近くには次のような文章が見られます。

実に、彼の幻想と想像とは深刻な写真と交って不可思議な調和を形作る。彼は人物の外面上に、わらずその精神をくつきりと掴む。ここに彼の偉大な人物描写と場面の構生が生れるのだ。私はここに学ぶべき劇界の新人を見る。

## ・終戦前後に用いていたスケッチ帳



小松は一九四二(昭和十七)年には海軍報道班員として南方諸島に赴き、その後、鹿児島県の鹿屋基地で終戦を迎えたことが知られています。当時用いていたスケッチ帳には、九州の風景に交じって、「4月8日アユチャにて」と記された仏像のスケッチが見られます。仏教遺跡で有名なタイの都市アユタヤを訪れた経験があることを物語る資料です。

## ・火星土地分譲予約受付証



小松は昭和三十年代には日本宇宙旅行協会の役員を務めました。同会から発行された火星土地分譲予約受付証は、大宇宙を見据えた、小松晩年の活動を偲ばせてくれる遺品です。

(竹浪直人、青森県近代文学館主事)

# 「詩人・村次郎展」を振り返って

上條 勝芳

村次郎は光源のような存在だった。文学・言語（開音三母音説・芸術・思想・民俗芸能・植物調査等を独自の発想と視点で展開している。全詩集刊行の節目に作品の全貌と生涯を概観する趣旨で、企画展「詩人・村次郎展」が平成二十三年十月八日（土）～十一月二十日（日）に開催された。

これまで青森県近代文学館では平成十四年一月十八日～三月三十一日に収蔵資料展「青森県の詩誌」で『くうたふむ』同人としての村次郎を紹介している。また平成二十年七月二十七日の特別展「青森県近代詩のあゆみ」（七月十二日～九月七日）朗読と対談の会で村次郎の詩集『風の歌』と『無神者にもひとしい僕の場合／風景とは／信仰なのかも知れない』を朗読した。図録には「村次郎の詩魂（精神の風景）」を執筆した。発表詩集・詩誌、詩稿・書簡・書画・色紙の十七点の資料が展示された。そして平成二十二年一月十六日～三月二十二日に「新収蔵資料展」の併設コーナー「詩人村次郎」で、弘前市の詩人・北島一夫氏が寄贈した十四点の資料が展示された。

今回の企画展で村次郎の生涯と作品世界の概説を執筆することで、改めて純粋な精神性を実感することができた。郷土の風景・風物と自身の生存・

生体は一緒であり、詩とは精神の風景であると主張するまでになった。種差海岸のあらゆる場所の花の種類と咲く時期が記憶されていた。「鮫角海岸段丘全植物目録」として整理されている。また採集した貝は「大須賀海岸貝殻木箱」に保管されている。しかし旧家の家業や戦争体験で苦悩し、生涯の擱筆を決意する。そして人間とは精神とは、つねに途上であり、到達点を持たざる永遠の途上者だと漂流者を意識してゆく。真実としての根源を追究してゆく求道者のようだ。十一月十三日の青森明の星高等学校放送部による「村次郎の詩精神（うた）（ころ）をきく」の朗読会は、流民に亡国の予感がする時代への見者からのメッセージのように聴こえた。

石田家旅館は初代石田多吉が鮫浦に明治十五年に開業する。財界や文化人等のサロンとして利用された。昭和六年に誕生した八戸小唄も当時の神田重雄八戸市長や新聞記者等の石田家の座談会で企画された。昭和十年八月二十八日には秩父宮様が宿泊している。空襲で被災したが、再建。平成十六年に廃業。平成二十三年三月十一日に東日本大震災の津波で被災し、昨夏に解体された。由緒ある石田家の歴史は写真や絵葉書、浴衣・手拭い・団扇、食器類等から窺うことができる。また『山の樹』同人、夏堀

正元や三浦哲郎、棟方志功や草野心平、井伏鱒二や司馬遼太郎等、文人墨客との交流は詩稿・蔵書・書簡・書画・写真・年賀状等で紹介されている。十月三十日に「村次郎作品の魅力」と題して佐々木朋子主幹が、同時代の詩人による作品の評価等を実証的に講話した。村次郎の弟妹の石田サツキ・村井村治・石田勝三郎氏から所蔵の資料が提供されている。新たな交友関係を知る手がかりにもなる。追悼詩は未発表詩集『亡友想日集』に纏められている。

ところで詩集『忘魚の歌』・『風の歌』と未発表詩集『途上』・『歸國』・『餘業私集』・『海村』・『神様の譚』・『無神者にもひとしい僕の場合／風景とは／信仰なのかも知れない』・『鮫角海岸段丘』・『蕪花群鷗』・『亡友想日集』・『老殘集』・『路傍集』・句集『向天唾集』を『村次郎全詩集』として平成二十三年九月二十四日に「村次郎の会」で発行した。そして八戸グランドホテルで出版記念会を開催した（東日本大震災の影響で五月四日の発行と五月十四日の出版記念会を延期）。

晩年まで推敲を重ねていた作品や企画展で展示された資料等から、本格的な村次郎研究が始まる予感がする。（かみじょうかつよし）

青森県近代文学館文学資料調査員



慶応義塾大学時代の作品掲載誌とフランス文学原書



「詩人・村次郎展」企画展示室全景

### 企画展「詩人・村次郎展」開催報告

「詩人・村次郎展」を、十月八日(土)から十一月二十日(日)まで開催しました。

一九一六(大正五)年、三戸郡鮫村(現・八戸市鮫町)の石田家旅館の長男として生まれた村次郎は、慶應義塾大学時代、詩誌「山の樹」を中心に作品を発表。中村真一郎や芥川比呂志、小山正孝らとともに活躍し、詩人として将来を囑望されました。

戦後、応召先の中国から八戸に帰還。「あのなつす・そさえて」を設立して郷里の文芸復興に努め、詩集『忘魚の歌』『風の歌』を刊行しましたが、一九五二(昭和二十七年)年、実家・石田家旅館の再建のため家業に専念、文学活動からの離脱を宣言しました。

この企画展は、二〇一一(平成二十三年)九月の『村次郎全詩集』刊行を契機に、あらためて村次郎の生涯と作品の全貌を概観しようと開催したものです。詩集・雑誌・原稿・色紙・遺品など計二一四点を展示し、会期中の来館者数は二〇〇一人でした。

初日の十月八日には、企画展示室前ロビーにて、村次郎の妹にあたる石田サツキ様、概説パネル執筆の上條勝芳様と、文学館館長・金子睦男により、テープカットを行い、開会を記念しました。

村次郎が生前発表した作品は、青春時代の作品を収めた『忘魚の歌』『風の歌』の二冊だけでしたが、戦後家業に専念した後も、生涯作品を書き続けたことが知られています。今回は、上條勝芳氏による概説「村次郎の生涯」に沿って、作品掲載雑誌「四季」「山の樹」「三田文学」他や二冊の詩集の草稿・初版本をはじめ、これまで公開されていなかった一九五二(昭和二十七年)以降の作品の詩稿「亡友想日集」「餘業私集」「海村」などの資料を展示しました。詩作に対し妥協を許さず、納得いくまで推敲を重ねた姿勢が現れている資料です。

また、郷里の自然と風物を愛した村次郎が調査収集した植物や郷土芸能の写真、貝殻標本や手製の釣り道具、ライフワークであった言語学関係の資料、石田家旅館ゆかりの浴衣や食器類、棟方志功・草野心平・三浦哲郎ら作家・文化人との交流を示す書簡など、詩人・村次郎だけでなく旅館主人・石田實としての多彩な横顔のうかがえる資料を紹介しました。

昨年三月十一日の東日本大震災により、歴史ある石田家旅館は大きな被害を受け、七月中に解体されて明治以来の歴史に幕を閉じました。津波の被害によって心身ともに大変な思いをされている中、御遺族はじめ関係者の方々は、この

企画展に全面的に協力してくださいました。被害を免れ残された村次郎の遺品類、石田家旅館ゆかりの品、そして全詩集刊行の基礎となった貴重な原稿を御提供くださったこと、村次郎生前の様々なお話を聞かせていただいたことに、あらためて感謝申し上げます。

十月三十日(日)には、日曜講座「村次郎作品の魅力」(文学館主幹・佐々木朋子)を、十一月十三日(日)には、青森明の星高校放送部による朗読会「村次郎の詩精神(うたごころ)をきく」を企画展示室前ロビーにて開催しました。村次郎の青春時代の作品を、若い世代の感性で表現していただくという文学館初の試みでしたが、参加者からは「透明な精神を感じました」「作品をじっくりきくことができました」と、大好評を博しました。

さらに展示終了後、八戸ポータルミュージアム、八戸高校、それぞれとの共催で「詩人・村次郎パネル展」を開催しました。各会場とも、当館企画展のパネルに資料を加え工夫した独自の展覧会となりました。当館の企画展がきっかけとなり、村次郎の地元である八戸市の多くの方に訪れていただいたことは、大きな意味がありました。『村次郎全詩集』の刊行とあいまって、今後、村次郎の作品が読み継がれ、取り上げられる契機になればと願っています。

(佐々木朋子、青森県近代文学館主幹)

### パネル展開催

本年度は特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」をはじめ、企画展ゆかりの地域の施設・学校等の御協力を得て開催いたしました。会場は以下の通りです。

#### ◇「西北五文学散歩」パネル展

大宰の宿ふくら文学館 4月6日～27日

#### ◇「竹内俊吉生誕一一〇年展」パネル展

つがる市生涯学習交流センター「松の館」 5月14日～30日

#### ◇「太宰治生誕一〇〇年」パネル展

八戸西高等学校 7月16日～17日

#### ◇「北村小松生誕一一〇年展」パネル展

八戸高等学校 7月16日～8月5日  
八戸ポータルミュージアム 8月22日～31日

#### ◇「大塚甲山没後一〇〇年」パネル展

東北町歴史民俗資料館 9月24日～10月20日  
上北中学校 10月22日～23日  
野辺地高等学校 10月18日～24日  
弘前工業高等学校 10月21日～23日  
三本木高等学校 11月8日～14日  
青森県営農科大学 11月15日～18日

#### ◇「詩人・村次郎展」パネル展

八戸ポータルミュージアム 12月19日～1月9日  
八戸高等学校 1月30日～2月10日

#### ◇「北村小松生誕一一〇年展」パネル展 ◇「大塚甲山没後一〇〇年」パネル展

県総合学校教育センター 1月6日～12日

### 新収蔵資料展「拓本でたどる青森文学の旅」開催報告

平成二十四年一月二十一日(土)から三月二十五日(日)まで新収蔵資料展「拓本でたどる青森文学の旅」を開催しました。本展では、工藤四代治の手になる拓本を中心に、文学碑の写真と碑文の出版作品や関連資料等を展示し、工藤四代治の業績と県内の文学碑の魅力を紹介しました。

工藤四代治は、一九〇九(明治四十二年)南津軽郡山形村(現黒石市)に生まれ、蕪木邑人のペンネームでやわらかな情感溢れる詩を発表しています。一九三九(昭和十四)年中国に渡り、一九四五(昭和二十)年二月に病を得て帰国するまでの北京滞在中に、中国人の専門家から拓本の技術を学んだことが、後の拓本研究のきっかけとなりました。

一九五四(昭和二十九)年「去来句社」を設立、青蛾と号し、句誌「青樹林」を刊行しました。また、一九五五年からは、「青森県句集」に中国滞在在材をとる句と方言句を毎回欠かさず発表し、短歌でも「潮音」等に出詠するなど文学活動を続けています。

黒石市の御幸公園に、秋田雨雀と鳴海要吉の歌碑を建立しましたが、拓本技術を生かす契機となりました。以後本県はもとより全国各地の文学碑等の採拓を行い、文学碑に関する著作を刊行。拓本研究者として名を残しました。

本展では、寄贈された約二〇〇点の拓本の中から、黒石市法眼寺の秋田雨雀の碑、佐井村願掛岩の鳴海要吉文学碑、外ヶ浜町龍飛の太宰治の碑、平川市三笠山の葛西善藏碑などの拓本三十二点、鳴海要吉『詩集 土にかへれ』、福士幸次郎『展望』、石坂洋次郎『わが日わが夢』など図書・雑誌六十四点を展示しました。また、工藤四代治が採拓に用いた遺品等も展示し、「拓本」についても紹介するものとなっています。

中でも、今回初展示となったのが、工藤四代治の未発表原稿です。工藤四代治は採拓した碑について、碑文や碑陰をはじめ詳細なデータをまとめ、地元である黒石の碑を取り上げた『青森県の文学碑第一集』を一九六九(昭和四十四)年に、弘前と五所川原周辺についての『青森県の文学碑 第二集』を一九七二(昭和四十六)年に、改訂版の『青森県の文学碑 1』を一九七七(昭和五十二年)に刊行しました。残念なことに、第三集以降は未完となっていますが、当館には県内各地の文学碑についての五百四十枚にのぼる原稿が残されています。工藤四代治の旺盛かつ丹念な活動を伝える資料として、その一部を展示しました。

本展に御協力いただいた工藤四代治御長女の海老原倫子・巽御夫妻が二月五日に来館され、遺稿を懐かしく御覧になりながら、句誌「青樹林」の思い出や採

拓の旅の苦勞などのエピソードを話してくださいました。

日曜講座は、二月五日が文学館室長飛内文代の「文学碑こぼれ話」を、三月十一日には青森ペンクラブ会長の三上強二氏を講師にお迎えして「拓本のことー拓本の墨と採拓ー」を開催しました。

(飛内文代、青森県近代文学館室長)



福士幸次郎文学碑拓本  
工藤四代治採拓

#### 第十回青森県近代文学館柳川大会

三月四日(日)、第十回青森県近代文学館柳川大会を青森県立図書館集会所で開催し、八十五名が作品を競いあいました。

第十回を記念して、神奈川県から川柳作家の渡辺隆夫氏においでいただき、「これからの川柳」というタイトルで講演をお願いしました。

渡辺氏は、ノンフィクション作家・佐野眞一から中世の「今様」・梁塵秘抄まで幅広い例をあげながら、これからの川柳には、思い切ったぶちこわしが必要で

ある、と論じました。新しい言葉を枠の中に投入して突破口としてほしい、技術にこだわらず、何を言いたいのかの意気込みが大切、笑いを忘れずにーなど、作句について大いに刺激になる内容で、ユーモアを交えての明快なお話は、参加者からも大好評を博しました。

大会の特選句は次のとおりです。

宿題「海」 斉藤綺羅選

海って海って巨大な位牌堂である 千島鉄男

宿題「海」 岩崎雪洲選

海って海って巨大な位牌堂である 千島鉄男

宿題「ささやき」 渡辺敏子選

なにもしてやれぬがふわり抱きしめる 高瀬霜石

宿題「ささやき」 佐藤俊一選

なにもしてやれぬがふわり抱きしめる 高瀬霜石

宿題「窓」 笹田かなえ選

窓越しに見てる私の一大事 まきこ

宿題「窓」 香田龍馬選

かあさんの窓はいつでも開けてある 佐藤千秋

宿題「うふふ」 広瀬ちえみ選

全身に川と書かれて川になる 佐藤とも子

宿題「うふふ」 高森ましろ選

先端はうふふと笑って角曲がる 佐藤俊一

席題「太宰治文学碑の拓本」 内山孤遊選

やさしくしてよ冷たい肌を愛してよ 笹田かなえ

席題「太宰治文学碑の拓本」 まきこ選

道尽きるここを出発点とする 柳谷たかお

資料寄贈者紹介

次の方々から資料を寄贈していただきました。ありがとうございました。今後とも当館への御支援、御協力を賜りますようお願いいたします。

平成二十四年二月二十九日現在

図書・資料受け入れ報告

平成二十三年三月～二十四年二月

- 青森県『見つけよう！伝えよう！あおもりの人財』マンガ誌 vol.1-1冊
○青森県歌人懇話会『青森県歌集』第54集
○青森県観光連盟『あおもり教育旅行ガイドブック』二冊
○青森県現代俳句協会『青森県現代俳句年鑑2011年版』二冊
○青森県詩人連盟『二〇一一年版県詩集 青森』
○青森県児童文学研究会『ずぐり』第74号 他図書・雑誌五冊
○青森県総合社会教育センター『学遊トピア あおもり2011』他二冊
○青森県俳句懇話会『新青森県句集 第二十二集』
○青森県文化財保護協会『東奥文化』第82号
○青森県芸協会『お園』他図書・雑誌百七十二冊
○青森県立郷土館『十和田湖・八甲田山』
○青森県立美術館『芸術の青森』
○青森市総務部総務課市史編さん室『新青森市史 通史編1 原始・古代・中世』
○あやめ書房『現代鎌倉文士』
○新谷博『雪天句集 第5集』
○石村柳三『詩集 合掌』他一冊
○市川市文学ブラザー『能村登四郎 その水脈』他一冊
○一茶記念館『小林一茶百八十五回忌 全国俳句大会作品集』

- 井上直哉『空飛ぶ円盤のあけぼの―北村小松『三〇随想集』』
○井上靖記念文化財団『伝書鳩』第11号 他三冊
○今谷弘一藤井正次小田切秀雄宛書簡十二点
○いわき市立草野心平記念文学館『新収蔵品展2011』
○岩波書店『荷風全集 別巻』
○鶴澤博『祖国の行方』
○潮出版社『太宰治の愛と文学をたずねて』
○梅内美華子『歌集 エクウス』他三冊
○蝦名泰衛『むじな』
○海老原巽『藤四代治拓本百七十八点』
○遠藤周作文学館『遠藤周作と映画』他一冊
○大阪国際児童文学館『第27回ニッサン童話と絵本のグランプリ 創作童話・絵本入賞作品』二冊
○大庭れいじ『歌集 ノーホエア・マン』
○大町芳章『余材庵余滴』一〜三計三冊
○小笠原真『詩集 初めての扁桃腺摘出術』二冊
○小笠原茂介『詩界』第258号特別号
○おかじょうき川柳社『おかじょうき(12-1)』他十三冊
○小熊健『櫻の匂』他一冊
○乙島社『乙島』第48号
○小野亥留馬『俳人の詠んだあおもり 第4集』
○垣内昭一郎『歴史と文化 かみきた21』第4号
○かじしま近代文学館『かじしま近代文学館公式カタログ』他二冊
○一風花随筆文学賞 実行委員会事務局『第14回風花随筆文学賞入賞作品集』
○神奈川文学振興会『遠藤周作展』他二冊
○兼平一子『おほみづあを』
○河北文化事業団『第60回平成22年度河北文化賞』
○鎌倉文学館『芥川龍之介と久米正雄 われら作家を目指したり』
○きしだみつお『初期社会主義研究』第23号
○北九州市市民文化スポーツ局『北九州市子』

- どもノンフィクション文学賞 受賞作品集』
○北九州市立文学館『花衣 俳人杉田久女』他一冊
○北九州市立松本清張記念館『松本清張研究』第12号 他一冊
○北村圭一『北村小松関係図書・特殊資料三十一点』
○木村雅子『歌集 夏つばき』他一冊
○黒岩恭介『VIEW』
○群馬県立土屋文明記念文学館『智恵子抄』という詩集』他二冊
○現代川柳『川柳集 明日への祈り〜東日本大震災〜』
○小岩尚好『静かなる中心』他十七冊
○高知県立文学館『高知の文学』常設展示図録』他二冊
○江東区地域振興部文化観光課『江東区の文化財2 深川寺町界隈』
○こおりやま文学の森資料館『草野心平 カエルの詩人展』
○国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター『平成21年度 博物館に関する基礎資料』
○小諸市教育委員会『第十七回 小諸・藤村文学賞入選作品集』
○さいたま文学館『直木賞文学と埼玉』他一冊
○齋藤茂吉記念館『齋藤茂吉記念歌集 第三十七集』
○堺市立文化館与謝野晶子文芸館『もうひとりの創作 与謝野晶子と文化学院』
○榊弘子『行為の意味』他一冊
○嵯賀昇『詩集 美ら島幻想』他一冊
○佐々木高雄『不思議な微笑』
○佐藤千秋『句集 おひさまいろ』二冊
○佐藤允則『自叙傳全集 太宰治』
○産経新聞社『第十七回「与謝野晶子短歌文学賞」選歌集』
○三省堂『中学生の国語 学びを広げる 三年』
○自作詩を朗読する会「エディヤ」創刊号
○実践女子大学文芸資料研究室『多田基旧蔵』

- 内田百閒 書簡・写真集』
○清水雪江『句集 朝ぼらけ』
○清水義和『寺山修司 海外ヴィジュアルアート』
○昭和館『ボスターに見る戦中・戦後』他パンフレット十部
○新宿区立新宿歴史博物館『新宿中村屋に咲いた文化芸術』
○杉並区立郷土博物館『炉辺閑話』No.44 他二冊
○杉沼永一『Biblia』
○鈴木紘治『マザー・グースの謎を解く〜伝承童謡の詩学〜』
○世田谷文学館『ことのははくぶつかん報告書』他一冊
○仙台・宮城ミュージアムアライアンス(SMMA)事務局『せんだいノート』
○川柳 あおの塔『あおの塔』第70号
○川柳ゼミ青い実の会『たわわII』二冊
○創童社『白い国の詩』通巻611号
○高井憲夫『伝統主義者 福士幸次郎を巡って』二冊
○節のふるさと文化づくり協議会『土のふるさと 第14回長塚節文学賞入選作品集』
○高橋憲二『青くあれ』
○高梁比庵会『第六回清水比庵大賞「短歌の部」入賞作品集』
○高山市生涯学習課『平成二十二年度高山市近代文学館調査・研究報告書』
○太宰治記念館『斜陽館』―「太宰歌留多」
○田澤ちよこ『四月のよろこび』
○多田美千代『風響樹』vol.40
○館田勝弘『おうよう自選句集 第一集』
○田中雅子『歌集 石のこだま』
○谷沢けい子『椿衛得て』
○調布市武者小路実篤記念館『生きぬく力〜実篤の言葉』他二冊
○対馬正子『埼玉文芸風土記』
○壺井栄文学館『第九回二十四の瞳岬文壇エッセー募集 受賞者作品集』
○鶴岡市立藤沢周平記念館『蟬しぐれ』の世界』他一冊

- 東奥日報社「『第1回東奥文学賞 作品集』他図書・雑誌十三冊
- 東京都江戸東京博物館「『東京都江戸東京博物館紀要』第1号
- 同志社女子大学「『31音 青春のころろ2 011』STUDIO百人一首『世界』
- 徳島県立文学書道館「『終の栖展』他三冊
- 中野道雄「『わが鎮魂歌』高木恭造の詩とその英訳」他図書・雑誌・特殊資料十八冊
- 中村キネ「『響れぞれ』二冊
- 名古きよえ「『京都・お婆さんのいる風景』
- 成田本店「『青春と読書』十冊『波』図書各十一冊 計三十一冊
- 新美南吉記念館「『第22回新美南吉童話賞 入選作品集 赤いろうそく』
- 仁科源一「『ラジオ・デイズ』他図書・雑誌・会報六十六冊
- 日本現代詩歌文学館「『鉄道と詩歌』
- 日本民主主義文学会「『民主文学』第552号
- 野口伐名「『陸羯南』愛国心 教育 博愛」
- 俳人協会「『夏休み親子俳句教室20年の歩み』
- 長谷川成一「『平成22年度太宰治自筆ノート 研究プロジェクト成果報告書』
- 八戸ポータルミュージアム「『八戸レビュー』
- 伴博「伴史郎関係図書・特殊資料三十三点
- PHP研究所「『歴史街道』通巻第285号
- 氷見市立博物館「『卑弥呼の時代の氷見』古墳出現前夜」
- 姫路文学館「『江の娘 千姫』他一冊
- 平野敏「『詩集 回顧』
- 弘前市立郷土文学館「『寺山修司一生涯地弘前と父として俳句』
- 福岡市文学館「『サークル誌の時代 労働者の文学運動1950・60年代福岡』
- 福土修二「『歌集 自像』他図書四冊、雑誌一冊
- 福田正夫詩の会「『彼岸桜』他図書・雑誌七冊
- ふくやま文学館「『井伏鱒二』(釣り文学)への招待』他一冊

- 藤谷和子「『歌集 風探す子と』二冊
- 藤田晴央「『弘前詩塾 No.18』他図書一冊
- 北奥文化研究会「『石に刻まれた歴史』西北地方の記念碑』
- 北海道開拓の村「『北海道開拓の村 研究紀要』III
- 北海道立文学館「『林静一 現代の抒情画家 女(こころ・恋心・童心)』
- 米田省三「『米田一穂全句集』二冊
- 前橋文学館「『小池昌代』他二冊
- 町田市民文学館「『とばらんど』『孤愁の詩人・画家 藤谷虹児展』
- 松山市立子規記念博物館「『子規博物館蔵名品集』他一冊
- 三上強二「『ハリマオ』他図書・雑誌・特殊資料五十一冊
- 溝口七生「『大塚甲山について』他二冊
- 三鷹市山本有三記念館「『女の一生(上・下)』計二冊
- みちのく北方漁船博物館「『絵図にみる青森 湊の景観』
- 湊川神社事務所「『湊川神社物語』他雑誌一冊
- 椋鳩十文学記念館「『全国読書感想文入賞作品集』
- 村井村治「『郡司大尉 報效義會鼎浦丸遭難顛末』
- 木曜会「『インターネット木曜手帖五周年記念 津波でんご』
- 守安敏久「『メディア横断芸術論』一冊
- 焼津小泉八雲記念館「『第20回(平成22年度)小泉八雲顕彰文芸作品コンクール入選作品集』
- 山口徹「『国語教室』第94号 他図書一冊
- 山梨県立文学館「『文芸映画のたのしみ』他一冊
- やまなし文学賞実行委員会「『真空管式』
- 立教女学院短期大学図書館「『福田清人・人と文学』他一冊
- 瑠璃の会「『瑠璃』第1号一冊
- 早稲田システム開発「『クラウド時代のミュージアム情報力』
- 渡辺隆夫「『川柳 宅配の馬』他七冊

定期刊行物(平成二十三年度分)

- 青嶺俳句会「『青嶺』
- 青森アララギ会「『青森アララギ』
- 青森県教育厚生会「『三潮』
- 青森県川柳社「川柳誌『ねぶた』
- 青森県長寿社会振興センター「『あおもり長寿セミナー』『あすなる倶楽部』
- 青森県歩道短歌会「『北潮』
- 青森古今短歌会事務局「歌誌『青森古今』
- 青森文学会「『青森文学』
- 青森ベンクラブ「『北の邊』
- 青森美術音楽鑑賞会「『ABOK』
- 尼崎芸術文化協会「『芸文あまがさき』
- 新谷ひろし「『雪天』
- 井上靖研究会「『井上靖研究』
- 大阪国際児童文学館「『国際児童文学館紀要』
- 大佛次郎記念館「『おさらぎ選書』
- 鬼発行所「『鬼』
- 小山正見「『感泣亭秋報』
- 海光発行所「詩誌『海光』
- 飾画の会「『飾画』
- 金沢文化振興財団「『研究紀要』
- 菊池寛記念館「『文藝もす』
- 北の会「『きたのやかた』
- 北の街社「『北の街』
- 国原社「歌誌『国原』
- 黒艦隊 俳誌「『黒艦隊』
- 群系の会「『群系』
- 薫風発行所 俳誌「『薫風』
- 群馬県立土屋文明記念文学館「『風』文学紀要2011』
- 群緑短歌会「『群緑』
- 勁草社「『勁草』
- 月刊弘前編集集「『月刊弘前』
- 越谷市立図書館 野口富士男文庫「『野口富士男文庫』
- 朔社「詩誌『朔』
- 此岸俳句会 俳誌「『此岸』
- シノノ「[Fishing Cafe]
- 紫明の会「『紫明』
- 下北文化編集委員会「『しもきた文化』
- 渋柿園俳句会 俳誌「『渋柿園』
- 昭和館「『昭和のくらし研究』
- 書肆 青樹社「『誌と創造』
- 書肆 北奥舎「『北奥風園』
- 真朱の会「『真朱』
- 水星舎「『アトランチスノート』
- 全国文学館協議会事務局「『全国文学館協議会紀要』
- 川柳触光舎「『触光』
- 川柳ゼミ 青い実の会「『青い実』
- 川柳塔みちのく川柳誌「『川柳塔みちのく』
- 川柳ひらひら川柳誌「『川柳ひらひら』
- 外海吟社「『外海』
- 高田寄生木川柳誌「『北貌』
- たかなな発行所 俳誌「『たかなな』
- 千田和美川柳誌「『風紋』
- 潮音社「『潮音』
- 調布市武者小路実篤記念館 解説シート「『もつと知りたいたい武者小路実篤』
- 帝國芸術新聞社「『帝國芸術新聞』
- 胴乱詩社「詩誌『胴乱』
- 徳島県立文学書道館「『徳島県立文学書道館 研究紀要 水脈』
- 豊巻つくし川柳誌「『うまっこ』
- 十和田かばちえつ川柳吟社「『川柳かばちえつ』
- 新美南吉記念館「『研究紀要』
- 日本民主主義文学会弘前支部「『弘前民主文学』
- Kashinoko「『本のパーキング』
- 八甲田川柳社「『川柳八甲田』
- 波止場の会「『波止場』
- はまなす発行所「『はまなす』
- 萬緑青森県支部 俳誌「『未来』
- 萬緑発行所「『萬緑』
- 姫路文学館「『姫路文学館紀要』
- ひら川吟社 俳誌「『ひら川』
- 平野敏「『平野敏詩誌 魚信旗』
- 弘前詩塾「『弘前詩塾』

- 弘前川柳社―川柳誌「川柳林橋」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前潮音会―短歌誌「すべーす」
- 弘前文学学校―「文学いちば」
- 弘前文芸協会―「文芸弘前」
- 弘前ペンクラブ事務局―「弘前ペンクラブニュース」
- 福井―「ム」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文化環境研究所「Cultivate」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」
- 文団・遙―「遙」
- 帆風美術館―「風」
- 北狄社―「北狄」
- 本郷七日会―俳誌「地塩」
- 松丘保養園慰安会―「甲田の楯」
- 松本皎―「葦笠亭・愚庵・古道人研究」
- 湊川神社社務所―「湊川」
- 無名群社―「無名群」
- 「群山」青森短歌会―「朔天」
- 明治大学学芸員養成課程  
―「紀要」[MUSEUM STUDY]
- 山田尚―「亜土 第二次」
- 山梨県立文学館―「紀要 資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 楳俳句会―「楳」
- 若菜の会―「若菜」
- 早稲田システム開発―「社内研修資料」
- 《館報》
- 青森県総合社会教育センター―「所報響」
- 青森田中学園―「こぶしの花」
- 石川近代文学館―「石川近代文学館ニュース」
- 石坂洋次郎文学記念館―「石坂洋次郎文学記念館新聞」
- 泉鏡花記念館―「鏡花雪うさぎ」
- 一茶記念館―「一茶記念館だより」
- 井上靖記念館―「井上靖記念館報」
- 岩手県立埋蔵文化財センター―「わらびて」
- 大阪国際児童文学館―「国際児童文学館 REPORT」
- 大島博光記念館―「大島博光記念館ニュース」
- 大原富枝研究会―「山査子」
- 大原富枝文学館―「やまなみ」
- 科学研究費補助金プロジェクト「昭和文学の結節点としての福永武彦―古事記からヌーヴォロマンまで」―「年報 福永武彦の世界」
- 学習院大学史料館―「ミュージアム・レター」
- かこしま近代文学館・メルヘン館報―「かこしま近代文学館・メルヘン館報」(平成22年度)
- 神奈川文学振興会―「神奈川近代文学館」(神奈川近代文学館年報2010年)(平成22年度)
- 金沢文芸館―「さんざの」
- 軽井沢高原文庫―「軽井沢高原文庫通信」
- 北九州市立文学館―「北九州市立文学館ニュース」
- 北九州市立松本清張記念館―「松本清張記念館報」
- 虚子記念文学館―「虚子記念文学館報」
- 熊本近代文学館―「熊本近代文学館報」
- 高知県立文学館―「高知県立文学館ニュース 藤並の森」
- こおりやま文学の森資料館―「こおりやま文学の森通信」
- さいたま文学館―「館報」
- 埼玉文芸家集団―「埼玉文芸家集団 会報」
- 斎藤茂吉記念館―「年報」
- 坂の上の雲ミュージアム―「坂の上の雲ミュージアム 年報」
- 昭和館―「昭和館報」
- 白鳥省吾研究会事務局―「白鳥省吾研究会会報」
- 世田谷文学館―「世田谷文学館ニュース」
- 全国文学館協議会事務局―「全国文学館協議会会報」
- 仙台文学館―「仙台文学館ニュース」
- 川内まごころ文学館―「平成22年度 川内まごころ文学館年報」
- 台東区立中央図書館 池波正太郎記念文庫―「池波正太郎記念文庫報」
- 鷹山宇一記念美術館友の会―「七戸町立鷹山宇一記念美術館友の会会報」
- 調布市武者小路実篤記念館―「館報 美愛眞」
- 壺井栄文学館―「壺井栄文学館だより」
- 東京都江戸東京博物館―「江戸東京博物館NEWS」
- 藤村記念館―「藤村記念館だより」
- 東北大学史料館―「東北大学史料館だより」
- 東北大学総合学術博物館―「ニュースレター On-line」
- 徳島県立文学書道館―「徳島県立文学書道館ニュース(こは)」
- 十和田市立新渡戸記念館―「十和田市立新渡戸記念館だより」
- 中原中也記念館―「中原中也記念館館報」
- 新潟県立歴史博物館―「新潟県立歴史博物館年報」
- 新美南吉生誕100年記念事業検討委員会―「新美南吉生誕100年通信」
- 日本近代文学館―「日本近代文学館」
- 日本現代詩歌文学館―「日本現代詩歌文学館報 詩歌の森」
- 日本ユネスコ協会連盟―「世界遺産年報2012」
- 俳人協会―「俳句文学館」
- 原阿佐緒記念館―「原阿佐緒記念館だより」
- 姫路文学館―「手帖 姫路文学館」
- 弘前市立郷土文学館―「北の文脈ニュース」
- 福岡市文学館―「文学館倶楽部」
- ふくやま文学館―「ふくやま文学館友の会だより」
- 文京ふるさと歴史館―「文京ふるさと歴史館だより」
- 「文京ふるさと歴史館年報」
- 北海道立文学館―「北海道文学館報」
- 前橋文学館―「前橋文学館報」
- 松山市立子規記念博物館―「子規博だより」
- 松山大学―「CREATION」
- 三浦綾子記念文学館―「みほんりん 三浦綾子記念文学館館報」
- 三鷹市山本有三記念館―「三鷹市山本有三記念館館報」
- みちのく北方漁船博物館―「みちのく北方漁船博物館だより」
- 宮校二記念館―「宮校二記念館だより」
- 棟方志功記念館―「棟方志功記念館だより」
- 明治大学学芸員養成課程  
―「年報 MUSEOLOGIST」
- 盛岡てがみ館―「平成22年度 盛岡てがみ館館報」
- 山梨県立文学館―「山梨県立文学館館報」
- 吉川英治記念館―「草思堂だより」  
(敬称略)

ギャラリートーク実施

文学館解説員による、常設展示作家十三人についてのギャラリートークです。本年度は「心に残るふるさとの景色」という共通テーマの下に実施しました。開催日と対象作家は以下の通りです。

- ① 10月23日 高木恭造
② 10月29日 福士幸次郎
③ 11月12日 三浦哲郎
④ 11月20日 寺山修司
⑤ 12月4日 秋田雨雀
⑥ 12月11日 太宰 治
⑦ 12月18日 長部日出雄
⑧ 1月22日 今 官一
⑨ 1月29日 北島八穂
⑩ 2月19日 石坂洋次郎
⑪ 2月26日 北村小松
⑫ 3月3日 佐藤紅緑
⑬ 3月11日 葛西善蔵



ギャラリートークの様子

今月の作家コーナー



溝口春翠の作品掲載誌

昨年度に引き続き常設展示室で「今年度の作家コーナー」を実施しています。今年度開催したテーマは以下の通りです。

- 4月 白木茂、小國英雄
5月 小山内薫、白木茂
6月 北村古心、小山内薫
7月 木村横斜、北村古心
8月 溝口春翠、木村横斜
9月 平田小六、溝口春翠
10月 北村小松新収蔵資料、平田小六
11月 草飼稔、北村小松新収蔵資料
12月 平井信作、草飼稔
1月 追悼・猿不次男、平井信作
2月 丹羽洋岳、追悼・猿不次男
3月 後藤蝶五郎、丹羽洋岳

なお展示内容や各作家の略歴については、当館ホームページ、左記のコーナーで見ることが可能です。

http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/

top/museum/kongetsu.html

館務日誌

- 4月15日 黒岩恭介氏(前青森県近代文学館館長)来館
4月23日 企画展「北村小松生誕一〇〇年展」開会
5月1日 小原健氏(北村小松展協力者)来館
5月8日 北村小松展日曜講座(竹浪主事)
5月14日 八戸工業大学76名見学
5月22日 天野護堂氏来館、出前講座「文人・竹内俊吉を語る」(がる市・竹浪主事、特殊資料庫蔵 巻5、26日)
5月29日 北村圭一氏(北村小松孫)来館
6月5日 企画展「北村小松生誕一〇〇年展」閉会
6月11日 大町芳章氏(大町桂月孫)、谷川妙子氏(大町桂月を語る会事務局)来館
6月15日 文学資料調査委員会
6月20日 東郷克美氏来館
6月24日 花巻市立東和小学校8名見学
7月8日 風張知子氏(八戸ポータルミュージアム館長)来館
7月11日 高等学校図書委員研修大会49名見学
7月16日 特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」開会式(テイクアウト)大塚宇一氏(大塚甲山姉の孫)、きしだみつお氏/来賓 大塚弘志氏(大塚甲川孫)、サトウユウジ氏、清野暢邦氏他)
7月20日 文学館評議委員会
7月21日 平川市図書館文学散歩青森県(黒石市・佐々木主幹)
7月24日 特別展講演と朗読の会
8月2日 板柳町子(とも)司書養成講座19名見学
8月9日 文学館展示ロビーにて田畑ヨシ氏による紙芝居実演会(命でん) (県立図書館主催の企画)
8月21日 第一回文学講座(福井緑氏、今谷弘氏)
8月28日 第二回文学講座(米田省三氏、安田保氏)来館
8月29日 工藤直人氏・貴子氏(鳴海完造長女夫妻)来館
9月2日 青森県高等学校教育研究会図書部会講演「図書館で学ぶ図書館から学ぶ」(青森市・飛内室長)
9月4日 特別展日曜講座(飛内室長)、田畑ヨシ氏による紙芝居実演会再演
9月5日 堀内昭一郎氏(特別展協力者)来館
9月8日 大崎町立大崎小学校32名見学
9月9日 弘前工業高校図書委員14名見学
9月11日 特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」閉会
10月5日 弘前市立第四中学校5名見学
10月8日 企画展「詩人・村次郎展」開会式(テイクアウト) 石田サツキ氏(村次郎姉)、上條勝芳氏/来賓 村井治氏(村次郎弟)他)
10月13日 第6回全国市議会議長会研究「オーラム150名見学、東北地区特別支援学校事務局長会研究協議会講演(青森市・佐々木主幹)、全国文学館協議会展示情報部会(旭川市・飛内室長)
10月15日 仙台市尚絅学院中学校3名見学
10月17日 東北町立上北中学校「大塚甲山を学習する会」講演(飛内室長)
10月24日 青森中央学院大学7名見学
10月26日 十和田市立東小学校32名見学
10月30日 村次郎展日曜講座(佐々木主幹)「図書館でくたくさ」30名見学
11月1日 十和田市立三本木小学校32名見学
11月2日 堀内彩子氏(三沢市先人記念館学芸員)来館、青森中央学院大学公開連続講座「少年・寺山修司と青森」(竹浪主事)
11月4日 青森市立荒川小学校21名見学、十和田市立三本木小学校40名見学、青森市の星中学校20名見学
11月5日 青森市立荒川小学校5名見学
11月8日 平川市立礎を関小学校16名見学
11月9日 青森市立長町小学校20名見学
11月13日 朗読会「村次郎の詩精神をきく」(青森市の星高等学校放送部)
11月15日 永橋禎子氏(富知県立文学館学芸員)来館
11月16日 秋田県立大館鳳鳴高校9名見学
11月20日 企画展「詩人・村次郎展」閉会
12月7日 板倉館村立田舎館小学校29名見学、東奥日報弘前管内音読教室27名見学
12月13日 板柳町女性団体連絡協議会22名見学
12月15日 弘前大学特別講座「比較日本文学論」(文学の基礎②)(竹浪主事)
12月24日 中川史子氏(田中浪延)来館
1月7日 野澤秀昭氏(青森県児童文学研究会会長)来館
1月21日 新収蔵資料展「拓本でたどる青森文学の旅」開会
2月5日 新収蔵資料展日曜講座(飛内室長)、海老原巽氏・倫子氏(工藤四代治長女夫妻)来館
2月22日 工藤健志氏(青森県立美術館学芸員)来館
3月4日 第十回青森県近代文学館川柳大会
3月11日 新収蔵資料展日曜講座(三上強一氏)

青森県近代文学館報 第二十九号

発行日 平成二十四年三月十九日

編集発行 青森県近代文学館

〒030-0184 青森市荒川字藤戸二九七

電話 〇一七三三九二五七五

http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/